

教務だより

2017年3月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

叱ると、褒める

茗溪塾塾長 宇野雅春

今大流行なのが「ほめ方研修」だそうです。私も仕事柄、親御さんに「褒めてください」とつい言うてしまう方です。なぜなら、叱られてむしゃくしゃしていると、確かに何事も能率が悪くなります。そういう私が、実際に先生方に対しては、褒めるより叱る方が多かったです。それでも最近は、言いたいことがあっても、ぐっとのみこんで我慢することの方が多くなってきました。確かに叱って改善されることは少なく、ただ恨みだけが積もっていくように感じるからです。話は戻りますが、その「褒め方研修」を受けているのがどういう人たちかということ、会社の中での管理職の人たちです。

最初に相手のいいところを見つけて、まず褒めます。「そのネクタイとてもお似合いですね。清潔感があって好感が持てます。」とか「話し方が、感じいいですね。落ち着いていて信頼感がわかります。」とかです。次の段階になると、否定的な要素をプラスに表現する練習になります。「仕事が遅くもたもたしていたら」…「慎重で丁寧ですね」とか「わがままで自分のやりたいようにやる」タイプには「決断力がある」とか言い換えて、褒めるにつなげる練習を積むのだそうです。時代も変わり、子供も変わり、親も変わる中で、打たれ弱い子供たちをいかにして鍛えていけるのが重要課題になってきている気がします。

強制力で一時的に子供を締め付けても、本当のやる気にはつながらないという事です。まして頭ごなしに叱るのは、逆効果。口でお説教を繰り返しても、そこをすり抜ける手段を子供たちは持っている気がします。

無気力そうに見えても、それは大人の攻撃を事前に防ぐ口実であって、本当にやる気がないという事とは違う気もします。「やる気ない！」と自分でいう生徒は防御線を張っているだけで、本当に無気力かどうかは断定できないということです。短気な親たちは、一瞬のうちに変わる子供を期待するのですが、そんな奇跡が起こるはずがないということも、実はみんなわかっていることです。ただし、人は変わるということも事実です。

子供のやる気を引き出すのが、「塾の役割」という事になります。これは新しいようで実はずいぶん昔からそうなのです。勉強がわかることで、やる気が出る！というのが以前の塾の形だったと思います。昔はそれでよかったです。通塾率が高い昨今では、さらに複雑です。ヒントとしては、箱根駅伝で圧倒的な強さを見せた青山学院陸上部の話があります。いわゆる鬼コーチではない監督の下でなぜあのような強いチームができたのか？

TVのドキュメント内容をまとめると以下ようになります。「自分の中に鬼をつくる」…それぞれが目標を決め目標に到達させるためのプログラムを組みます。何人かでそのプログラムを検討しさらに書き直し、それを掲示して練習に取り組みます。自分から進んで取り組むスタイルがそこにあります。そこまで行くとコーチは叱るより褒めることが多くなります。つまりただ褒めればよいという事ではなく、褒められる状況をどう作っていくのかということなのだと思います。今の子供を鍛えていくカギがそこにあるように思います。